校長の生徒・先生応援日記 Vol.25

学びの匂い

当たり前を疑ってみる

人類は、太古の時代から太陽や月、星などすべての天体が地球の周りを回っていると信じていました。ところが、ガリレオ・ガリレイは、木星の表面を移動する奇妙な４つの光から宇宙の中心が地球ではないことを発見すると、その時代における「当たり前」が大きく変わりました。このように、定説を覆すことをパラダイムシフトと呼びます。人は、往々にして自分を中心にモノやコトを見たり考えたりする傾向があります。たとえ地動説の様な説明がつかない天文学上の矛盾があっても、今の考えに問題がなければ変化を拒む心理が働くのでしょう。

時は流れて二十一世紀の今、科学の進歩は、宇宙だけではなく、人間の根本的な謎をいくつも解明してきました。しかし、いかなるテクノロジーをもっても、私たちの生活には、何の根拠もない考え方が未だに根強く残っており、生き方そのものに豊かさを与えらずにいることがあります。

昭和４０年代までのことです。「左利きは苦労する」と、将来を悲観する親が多くいました。実は私も左利きで、ギッチョだからと周囲からは好奇の目で見られる対象でした。でも我が家は幸いにして、世間一般の価値観に合わせたような考えはなく、当時のプロ野球 400 勝投手の金田正一選手が左利きだったことから、「将来は野球のエースだ！」と父が嬉し気に私を自慢していました。そのおかげで、書くこと、持つこと、握ることなど、生まれた時から人として備えるべき機能を左手が担い、何一つ不自由なく過ごしていました。

しかし、小学校入学直後に状況が一変します。担任が全生徒を前に「左利きは苦労する。今のうちに絶対に直しておきなさい！」と説明したのです。当時、この言葉に異を唱える保護者はいませんでした。なぜなら、就業前までに箸や鉛筆を右手に矯正することが一般的だったからです。

結果、クラスの中で左手を使う左利きは私だけであり、字を書いたり、給食を食べたりするために左手を使うと、みんなの前で怒られました。利き手に対する罪悪感は、７歳の心では受け止めきれなかったのでしょう、吃音や夜尿症、ついには鉛筆を持つと指先の震えが止まらなくなるなど身体に異変が起きました。このことに気付いた父親は、担任へ怒りを露わにして訴えると、その後、執拗な注意はなくなりましたが、周りの友だちの冷ややかな目が辛く、結局、人前で左手を使うことがとても苦しかったことを思い出します。

何かに怯えるように過ごす日々の中、小学４年生でパラダイムシフトが起こりました。担任が全生徒を前に、「左利きは、十人に一人しかいないのではなく、十人に一人の選ばれた人なんだよ。」と紹介してくれたのです。この先生の一言で、私への見方は大きく変わり、気が付くとコンプレックスの左利きが自慢になっていました。その後、少年野球に没頭した私は、サウスポーが武器となって活躍できたことは皆さんのご想像のとおりです。

日本では、約１割の人が左利きといわれています。それは、おおよそ一千万人に及ぶ計算だそうです。そのため、文具や生活用品、駅の自動改札などの日常生活を送る必要な動作の不便さは、昔も今もあまり変わっていないと感じます。私は、今でも「左手で上手に字を書きますね。」と声を掛けられると、「あなたの方がすごいと思います。だって右手で字を書くのだから。」と、ついつい反論してしまいます。なぜなら、いつから右利き社会になったかは定かではありませんが、左利きへのマイノリティ的な関心をとても残念な気持ちに思うからです。

皆さんも、科学的根拠に基づくものではなく、社会や集団の生活の中で知らず知らずに身についてしまうステレオタイプの偏見がありませんか。まもなく新しい年を迎えるこの機会に、これまで気にすることがなかった自分の「当たり前」を疑ってみてください。

過去の経験をきっかけとしてもってしまう先入観は、敢えて意識的に自分の主観を揺さぶるような行動を取ってみることで、それが自分の考えではないことに気付くことがあるかもしれません。

例えば、勉強する場所を変えてみる、いつもより朝早く登校してみる、考え方が合わない友達に声をかけてみる、家族と過ごす時間を多く見つけてみる、この様な些細な工夫があなたの見方を変え、学びの匂いとなって運命をも変えてくれることでしょう。

令和６年 12 月